二條城清流園の成立過程及び地割・植栽の経年変化について

Chronological Changes of Layout and Plants Grown at Seiryu-en of Nijo Castle

内田 仁* 北山 正雄**
shinobu UCHIDA Masao KITAYAMA

摘要：本研究は二條城清流園の成立過程及びその経緯、更に地割・植栽の経年変化について考察した。京都市はかねてより城に不釣り合いな市民のレクリエーション施設であるテニスコートを撤去し、国賓・公賓を迎える迎賓施設として、また市民や観光客にも利用できるような新庭園の作庭を検討していた。そのような折テニスコート代替地決定と旧角倉了以邸の敷地内の建物などの無償譲渡の確約が得られたことを機に、京都市職員が直営で10ヶ月の歳月を費やし昭和40年4月清流園を完成させた。清流園は作庭から35年以上経過している現在でも地割・植栽ともほとんど変化なく維持され、鑑賞要素の一つにとどまらず迎賓・集会的な役割を果たすこととなった。

1. はじめに

現在世界文化遺産に登録されている二條城には、二の丸庭園、本丸庭園、清流園の三庭園がある。既に二の丸庭園¹⁾及び本丸庭園²⁾³⁾の歴史的経緯について報告してきた。ここでは、近年作庭された二條城清流園を対象とする。まず、同庭園に関する既往研究の概観及び本研究の意図する所を述べる。

この庭園に関する研究は京都市二條城事務所がその概要⁴⁾及びテニスコート撤去から作庭に至るまでを紹介し⁵⁾、また中根金作氏が概要と作庭当時の様子についてを若干報告してきた⁶⁾⁷⁾。しかしこれまでの研究には作庭から35年も経過しているにも関わらず、学術的に成立過程とその経緯についてまとめたものではなく、作庭記録は未整理のまま21世紀を迎えようとしている。そこで本研究は文献・史料、実測図、聞き取り調査などを基に二條城清流園の成立過程とその経緯について整理し、昭和40年(1965)から平成12年(2000)現在に至るまでの地割の経年変化と植栽の変遷について考察する。

2. 二條城の概略史

現在京都市二条堀川に位置する二條城は徳川家康が西国大名に命じ、慶長6年(1601)から城普請が始まり、慶長8年(1603)大略完成したと推測される。秀忠、家光は後水尾天皇の行幸を二條城に仰ぐため、寛永元年(1624)9月から寛永3年(1626)9月の行幸時までに本丸増築、行幸御殿の殿舎など大規模な増改築を行ない、寛永2年(1625)二條在番を置き、寛永3年9月に後水尾天皇を迎えている。寛永4年(1627)から承応元年(1652)頃までに行幸諸施設などは移築・撤去された。寛延3年(1750)天守閣は落雷により焼失、本丸御殿や同櫓などは天明8年(1788)市中の大火の飛び火により焼失し、それらは再建されることなく幕末を迎えた。

文久3年(1863)14代将軍家茂が家光上洛以来229年ぶりに上洛し、二條城は再び京都における幕府の政治拠点として利用されはじめた。江戸時代最期の将軍となった15代将軍慶喜が慶応3年(1867)10月14日大政奉還を発表し徳川政権の幕を閉じたのも二條城である。新政府に没収された二條城は明治元年(1868)に太政官代が置かれ、明治4年(1871)京都府(一時陸軍省の所管)へ移管され、更に明治17年(1884)宮内省へ所管が移った。大正時代には大正4年(1915)大正天皇御即位式の1

つである饗宴の儀が行われている。昭和になり、昭和14年(1939)宮内省より京都市に下賜され、昭和15年(1940)から恩賜元離宮二條城として一般公開され、歴史的な文化遺産として継承された。二條城は太平洋戦争中も被害を受けずに、昭和27年(1952)二の丸御殿が新国宝、翌28年には二の丸庭園が国の特別名勝の指定を受け、平成6年(1994)12月世界文化遺産に登録されて現在に至っている。

3. 清流園地区の変遷と作庭に至るまでの経緯

創建時の清流園地区(二條城北部)は城内通路、天守閣の一部が占めていたが⁸⁾、寛永元年から同3年の二條城増改築の折には、天守閣が淀城へ移築され空地となった。寛永11年(1635)以降、東御番衆小屋が建造され、天明の大火の飛び火によって一時焼失するが再び建造し、明治前期に撤去された。大正時代になり、二條城は大正天皇即位式饗宴の儀の会場として利用され、清流園地区には饗宴施設を増築した。大正御大典の翌大正5年(1916)より城内の復旧工事が行われ⁹⁾、饗宴施設の一部は岡崎桜の馬場に移築、跡地には緑地(疎林式庭園)が復旧された。昭和25年(1950)この地区は進駐軍の命令で、第4回マッカーサー杯争奪戦を行うため、疎林式庭園がテニスコートに転用され、清流園造営までの間、城に不釣り合いなレクリエーション施設が設置される時代となった。このテニスコートについては当時の文化財保護委員会からも苦情がでていたが、代替地がないためそのままとなった。しかし、昭和38年(1963)西院公園テニスコートが計画決定され、テニスコートの代替地ができることとなった。またこの頃の京都市には外国の賓客を迎える施設がなく、個人所有の庭園をしばしば借用していたことから、かねてより京都市はテニスコートを撤去し、二條城に新庭園の作庭を検討していた。そのような折、昭和38年日本銀行京都支店が店舗新築のため田中市兵衛別邸(角倉了以邸跡¹⁰⁾)を買収したことを機に、京都市は同敷地内の茶室や集会所、庭石、庭木などの譲渡を依頼し、無償で譲りうけることとなった。譲渡にあたり日本銀行との贈与契約書が交わされ、その第1条には「甲(日銀)は本物件を乙(二條城)が二條城内に移設、復元し来洛国賓等の接遇ならびに一般市民の憩いの場として公的使用に供する事…」と記されていた。しかし二條城内の移設場所の立地条件が異なり、またそのまま移設すると憩いの場として利用するには無理があった為、日銀の了解のもとに

*京都市文化市民局元離宮二條城事務所 **元京都市文化市民局元離宮二條城事務所

二條城にふさわしい様、また国賓、公賓を迎える迎賓施設として、更に京都市民は勿論、一般観光客の憩いの場所として利用する主旨のもとに新庭園を造成するに至った。

4. 清流園成立過程

(1) 計画図面

新庭園は市民が利用していたテニスコート9面の5000坪余りの敷地に計画され、計画にあたっては当時京都府文化財保護課の中根金作氏によって旧織殿庭園（旧田中市兵衛別邸茶庭¹¹⁾ 図1])を参考に設計が行なわれた。図2、図3の計画図¹²⁾ は中根氏が作成し、現状変更の許可申請を文化財保護委員会に提出したもので、

図-1 旧織殿庭園（旧田中市兵衛別邸茶庭）（原図縮尺1/200）

図-2 二條城新庭計画図

図-3 二條城北新庭計画平面図（原図縮尺1/300）

図-4 二條城テニスコート跡地計画平面図（原図縮尺1/300）

東西に洋風、和風に分けた庭園で、洋風庭園は芝生を主体とした広場が、和風庭園は西北隅に滝口を設け開放的な流れと築山を強調した庭園が描かれ、また茶室や休憩所も計画されていた。但し、中根氏の描いた図面には池はなく、また水車や照明の計画もされていなかった。更に図4の計画図¹³⁾ は聞き取り調査で作成者、作成理由不明であったが、池の有無、池を廻る園路以外、茶室、休憩所、樹木の描き方など全く同様な図面であることから、中根氏の計画図に変更が加えられたものと思われる。最終的に図4が施工する上での計画図として採用されたものと考えられる。

(2) 作庭について

新庭園は現場合わせなどによって計画が変更され、図2、図3では池、中島を設けるなどの点、図4では中島の数、橋の個数、池の形など異なる点もあるが、西北隅に滝口、築山を配し、西側に茶室、洋風庭園との境に休憩所を設ける基本的なゾーニングがほぼ一致している。新庭園は昭和39年6月施工、同40年4月竣工、総工事費2600万円（時価に見積もると1億円以上）で完成、同年4月14日当時の高山義三京都市長が庭園を「清流園」、茶室を「和楽庵」、旧織殿を「香雲亭」と命名し、同年4月28日庭園開きが行われた。尚、当時急遽国賓来訪予定のため照明計画が行なわれ、庭園内には所々屋外用コンセントが設けられた。しかしその後問題点も多く、実際に今日まで使用したのは数える程であった。

作庭の総指揮は当時の二條城事務所長石田四郎氏があたり、そのもとで、事業係長広瀬功一氏、管理係長北山正雄、営繕担当宇野幸次氏をはじめとして、当時二條城全職員の並々ならぬ努力があつてこそ完成したと言える。施工にあたっては京都市職員が直営で行ない、中根金作氏、15代佐野藤衛門氏、小宮山博康氏、井上良一氏、垣口藤太郎氏らの京都を代表する造園家の指導、協力も得て作庭が行なわれた。当時は現在のように優れた機械、機具はなく、池の掘削はブルドーザー及び手堀りで行ない、池底は粘土で覆ったのちコンクリート打ちで仕上げ、築山は一輪車、ベルトコンベヤーを利用し盛土した。更に庭石や庭木は三ツ又、チェーンブロック、修羅、チルホール等昔ながらの道具を用い全く手作りの庭と言って良かった。それだけに石を1つ据えるにも十分納得ゆくまで時間をかけて行なわれた。施工にあたっては石組、植栽工事、芝張りなど全般を二條城職員が担い、池の石組は小宮山氏の指導のもと各造園業者に分担して岩組にあたった。また滝口から溪流、遣水が池に落ちるまでを中根氏が指示し^{14)~16)}、特に滝口は旧織殿庭園の滝口を参考に岩組された。また施工の段階で池の面積が小ぶりであったことから小宮山氏が拡張することを提案し、東に若干拡張され現在の規模に至った。

和楽庵は建坪18坪で残月亭（表千家）の写しの新造を数寄屋師笛吹嘉一郎氏が表千家家元千宗左宗匠の指導を受けながら建て、譲渡を受けた屋敷の一部が付け足された。また茶室及びその周辺露地作庭には表千家久田宗匠の指導によるもので、つくばいの役石は表千家流となっている。また香雲亭は建坪40坪余りの同屋

図-5 二條城清流園略平面図（原図縮尺1/300）

敷跡の一部（旧織殿）を移築したものである¹⁷⁾。尚、水車は清流園完成直後に後付けされたもので、亀岡市曾我部町農業斎藤義一氏によって寄贈され、昭和41年（1966）3月完成している。またその後もハゼノキの植栽や景石、燈籠据付などが行なわれ¹⁸⁾、実際に現在の庭園形態が完成したのは昭和43年頃であった。

(3) 清流園の特徴

清流園は総面積16500㎡で東側半分の洋風庭園、西側半分の和風庭園に分けることができる和洋折衷の庭で、洋風庭園はガーデンパーティーも開けるように芝生を主体とし、その周りにはヤエベニシダレ、ヤマザクラ、サルスベリ、モミジバフウ、イチヨウなどが植栽され春、夏、秋と花木や紅葉が楽しめるよう工夫され、昭和61年（1986）ダイアナ妃に着物が贈呈された場などとしても利用された。和風庭園は雄大・明朗・風雅をモチーフに作庭され、築山林泉式の様式をとり、西北隅に築山・滝口を配し、滝口、遣水、池と続き、池が庭園の3分の1を占め、西側に和楽庵、北西に香雲亭を配した構成となり、燈籠、水車などの配置や樹種の配植に工夫を凝らし多くの鑑賞ポイントを設けている。現在ではこれらの建物は市民大茶会をはじめ、国賓、公賓来城の際に茶の湯の接遇に利用されている。（図5）

(4) 造園材料

作庭に使用された資材は、日本銀行より無償で譲渡された建物の一部及び燈籠、石橋、庭石（800個）、庭木等の他に全国各地より収集した銘石（約300個）と篤志家より寄贈をうけた庭石、庭木等、植物園から譲り受けたメタセコイヤ、城内から移植したシダレザクラ、新たに購入した池周りの小ぶりなマツなどがある。庭石は主に京都産（清滝川石・丹波石・貴船石・鞍馬石・雲ヶ畑石・宇治石・灰屋川石）、滋賀産（瀬田石・愛知川産石（永源寺石）・犬上川産石・姉川石灰石）、岐阜産（飛騨川石・揖斐川産石）、愛知産（佐久石）、青森産（錦石）、石川産（石灰岩石）、愛媛産（伊予青石）、徳島（赤石）、静岡産（富士石）など全国から集めた庭石600個を用いている。

次ぎに作庭から35年経過した清流園の地割の経年変化及び植栽の変遷について述べる。

5. 地割の経年変化及び植栽の変遷

(1) 地割の経年変化

清流園の地割は実測図¹⁹⁾（図6）と現況との比較、聞き取り調査²⁰⁾から和風、洋風庭園とも地割、中島、州浜、燈籠、つくばい、香雲亭、和楽庵の配置など変化なく維持されていることが確認できた。但し、図6は清流園完成直後に実測が行なわれたため、和風庭園側に水車、延段が、洋風庭園側に景石、燈籠、つくばいなど描かれていない。

(2) 植栽の変遷

清流園の植栽は図6、樹木調査及び写真の比較、更に聞き取り調査²⁰⁾などからほぼ変化なく維持されている。図6と現況との比較ではほぼ変化なく、また昭和40年代と平成6年にに行った樹木調査（表1）との比較では、総本数約311本もの差があり、樹

図-6 二條城清流園実測図（原図縮尺1/200）

表-1 昭和40年代（1965年代）と平成6年（1996）樹木調査比較

樹木名	昭和40年代調査	平成6年12月調査	樹木名	昭和40年代調査	平成6年12月調査
アオキ	12	31	ツバキ	26	94
アセビ	109	99	シダレザクラ	1	1
アメリカデゴ	1	0	トウカエデ	2	7
アラカシ	488	171	ドウダンツツジ	763	554
イチヨウ	31	13	トベラ	7	28
イトヒバ	0	14	トチノキ	1	0
イスミワ	0	2	ナツミカン	0	1
ウバメガシ	12	9	ナワシログミ	0	1
ウメ	2	2	ナンテン	1	1
ウンリウヤナギ	3	0	ネズミモチ	2	5
エノキ	1	2	ハイバクシン	10	0
オオムラサキツツジ	43	18	ハギ	24	22
カキノキ	0	1	ハクチョウゲ	2	2
カツラ	1	1	ハゼ	5	4
カナメモチ	5	1	ハナミズキ	2	1
カンツバキ	0	1	ハルニレ	0	5
カヤ	0	5	ハンノキ	7	0
キタヤマシギ	56	53	ヒラキナンテン	9	7
キンモクセイ	2	4	ヒラキモクセイ	2	2
ギンモクセイ	0	1	ヒサカキ	102	144
キヤロボク	22	22	ヒノキ	1	0
クスノキ	7	25	ヒムロスギ	1	0
クチナン	2	12	ビラカンサ	3	0
クロガネモチ	5	15	ビワノキ	0	4
ケヤキ	17	16	ワイリアオキ	0	5
コウゾウ	0	1	フユサンゴ	0	1
ゴモジ	1	2	マキ	8	10
コメツガ	22	22	マサキ	3	2
サクラ	52	30	フジ	1	0
サザンカ	5	4	マツ	107	129
サツキ・クルマツツジ	628	721	マテバシイ	2	2
サルスベリ	2	2	マユミ	1	0
サンシュユ	1	1	マルバヒラギ	1	1
サンゴジュ	5	7	マンサク	0	1
シダレザクラ	28	19	マンリウ	7	1
シラカン	21	10	ムクゲ	0	3
シヤクナゲ	6	5	ムクノキ	2	2
ジンチョウゲ	1	0	メタセコイヤ	13	8
スリリュウヒバ	8	0	モチノキ	8	16
スダジイ	1	0	モツコク	27	29
センダン	3	6	モミノキ	8	2
センリョウ	0	1	モミジ	48	47
タイサンボク	0	1	モミジバフウ	8	7
妹ヨウヨウ	19	9	ライラック	1	1
タブノキ	0	2	ヤツデ	17	19
タマイブキ	11	10	ユズ	1	0
ツゲ	9	21	ウツロ	1	14
			合計本数	2887	2576

昭和40年代調査ではキコウチク、モウソウチクが植栽されているにもかかわらず、カウントされていないため、現況のキコウチク(73)、モウソウチク(49)を省いた。昭和40年代調査のアラカシ、イチヨウ、サクラ、シダレザクラ、妹ヨウヨウ等は緑の園まで含めた本数と思われる。

写真-1 東山方面望む
（昭和40年頃撮影）

写真-4 東山方面望む
（平成12年撮影）

写真-2 滝組方面望む
（昭和40年頃撮影）

写真-5 滝組方面望む
（平成12年撮影）

写真-3 香雲亭方面望む
（昭和40年頃撮影）

写真-6 香雲亭方面望む
（平成12年撮影）

種によって多少の増減は認められたが、対象外地域（緑の園）のアラカシ、イチョウ、サクラ、シダレエンジュ、シダレザクラ、タギョウショウなど重複した本数や生垣の数え方の違いなどを勘案するとほぼ一致した本数であったと考えられる。昭和40年代の写真（写真1～3）と現況（写真4～6）を比較すると、写真1～3は植栽年数が浅いこともあり土手周囲の樹木なども開放的な整備状況であったのに対し、写真4～6では周囲の樹木は覆い茂り、若干開放的イメージが薄れた。だが、周囲に建物などが建造され目隠しとしてやむをえない状況になっている。更に聞き取り調査から香雲亭北側のマツ、滝組西側はハゼノキ、築山から水車の間のケヤキ、水車周囲に植えられていたヤツデ、水車前芝地内のマツ、昭和50年代に梅軒門西側のカスミザクラが、昭和63年頃に池南側のクロマツが枯損し、補植されずに今日に至っているものや新たに植栽された樹木など若干の変化はみられた。また借景として取り入れられている東山も除々に周囲の建物などで見えにくくなってきているのが現状である。

6. まとめ

本研究は既往研究や文献・史料、平面図史料、聞き取り調査などを基に二條城清流園成立過程及びその経緯、更に作庭（1965）

から平成12年（2000）までの地割の経年変化と植栽形態の変遷を考察した。昭和25年進駐軍の命令によって清流園地区にテニスコートが設置され、その後市民に開放され人気を博し、二條城は文化財の維持と観光要素に加え、レクリエーション的な要素をもつミスマッチな城として維持されていた。しかし昭和40年それに代わって日本銀行から無償の譲渡を受けた建物や庭石・庭木や危篤家からの寄贈などの材料を利用し清流園が造営された。これにより清流園地区はレクリエーション的役割から観光客への鑑賞要素の1つにとどまらず、二條城を訪れる諸外国の国賓・公賓の接遇の場としての迎賓的、また市民茶会の集会的役割も果たすこととなった。地割・植栽は作庭から35年以上経過している現在でもほぼ変化なく維持され、近代庭園の特徴を有した昭和の名園として永く後世に残すものとする。

謝辞：本稿をまとめるにあたり、東京農業大学造園学科鈴木 誠先生、京都市元離宮二條城事務所の元課長補佐宇野幸次氏、管理係長久保啓輔氏、庶務係担当係長坂井 清氏、統括主任内田完治氏、主任水本鉄也氏ら諸先輩方や後輩方のご指導、ご協力を賜ることができた。記して感謝の意を表します。

文献並びに注

1) 内田仁・鈴木誠（2000）：二條城二の丸庭園の庭園景と担った役割の変遷、4月29日仮受付

2) 内田仁（1991）：二條城本丸庭園における作庭の変遷：造園雑誌 54(5), 19-24

3) 内田仁（1994）：近代における二條城本丸庭園の地割・植栽の経年変化について：造園雑誌 57(5), 7-12

4) 高橋脩二（1998）：清流園について

5) 荒賀利道（1970代）：二條城の緑と花：京都市, 6-7

6) 中根金作（1986）：元離宮二條城：京都市, 51-53

7) 中根金作（1991）：庭第77号 人と作品 中根金作の世界：建築資料研究社（1）, 122-123

8) 六曲屏風一隻（文化庁、富山・勝興寺、出光美術館、堺市美術館、大阪美術館、（萬野B本）萬野美術館）、左隻全図（東京河合本（河合正朝蔵）、大阪北村本（北村芳郎氏蔵）、京都林本（林喜作蔵）、司馬本、反町家本、東博本、山岡本（京都山岡鉄兵衛蔵）、岡山美術館本、六曲屏風一双（〔萬野A本〕萬野美術館、神戸市立美術館、林原美術館、京都個人）、寂光院本、松居家本など20本の洛中洛外図屏風の比較より分析し、内8本に城内通路、樹木、天守閣の3点が描かれていた。

9) 宮内庁（1916）：大正五年六月起復旧工事日報綴二条離宮元大禮使造営支部残務取扱：宮内庁京都事務所蔵

10) 角倉了以は江戸初期の豪商で、土木事業家としても知られ高瀬川を開き、伏見までの漕路を通すなど徳川幕府にその業績が認められ、現在の河原町二条下ル一之船入町付近に邸地を賜り、邸宅を築き林泉を作った。この地は明治新政府によって土地されるまで角倉家によって引き継がれた。

11) 明治維新に上地された角倉邸宅は、その後京都府のものとなり、明治7年同敷地内に織工場を建て、明治11年工場を増築し、明治12年4月これらを織殿と改称した。明治14年以降は中井三郎兵衛、再び京都府、京都府織物工場株式会社など所有者が転々とした。近年大阪富豪田中市兵衛の所有となり、館舎を増改築し、その折林泉も大改修された。旧織殿庭園という呼び名は旧織殿から庭園が望めたことから付けられたものと考えられる。

12) 中根金作（1964）：二條城新庭計画姿図及び二條城北部新庭計画平面図：元離宮二條城事務所蔵

13) 元離宮二條城事務所：二條城テニスコート跡苑地計画平面図

14) 注7と同じ。「私の作庭した部分は格調ある古典の技法を基調とした石組と地割を行っている。茶室の前面は明るく品位と侘びを持った雰囲気を流れとした。」と記している。

15) 京都新聞（1964〔昭和39〕年10月23日付）：中根氏は「少し完成を急いだのがちょっと残念です。しかし地割、構成からいっても金閣、銀閣にも劣らない大庭園だと思っています。」と述べている。

16) 京都新聞（1964〔昭和39〕年12月27日付）：中根氏は「石組にもっとも苦労した。四方、八方から見ることのできる庭だけに机上のプランではダメで、実地に石を置いたり組変えたりして、ほぼ満足な庭となった。」と完成後の感想を述べている。

17) この建物は旧角倉邸宅の一部で、その後織殿と呼ばれ京都の産業復興の一端を担った。また明治天皇が行幸した由緒ある建物でもある。戦後竜村美術織物株式会社が田中氏からこの建物を借り、織物の展示を行ない海外でも有名であった。

18) 清流園完成後も水車南、和楽庵南にハゼノキ、清流園からも望めるように本丸東北南隅櫓跡にハゼノキ、レンギョウが植栽され、また洋風庭園には獅子形の景石や鞍馬石の燈籠が据えられるなど若干の手が加えられていた。

19) 元離宮二條城事務所（1965）：二條城清流園実測図

20) 元管理係長荒賀利道氏、同奥野慶一氏、現久保啓輔氏、統括主任内田完治氏、主任水本鉄也氏、元事業係長広瀬功一氏、同宇野幸次氏、同高橋脩二氏、現庶務係担当係長坂井 清氏らによる聞き取り調査を昭和62年から平成12年までの間に行なった。

Summary : In this study, I investigated the process of construction and the changes of layout and plants at Seiryu-en of Nijo Castle. In Koto City, it has been studied to construct the new garden as the facility for the reception of official guests of the City, or citizens' cultuval event. It took ten months to coustruct the garden in 1965 under direct management of the City office. The layout and plants of the gardner is almost unchanged during over 35 years from it's coustruction.